

レポート

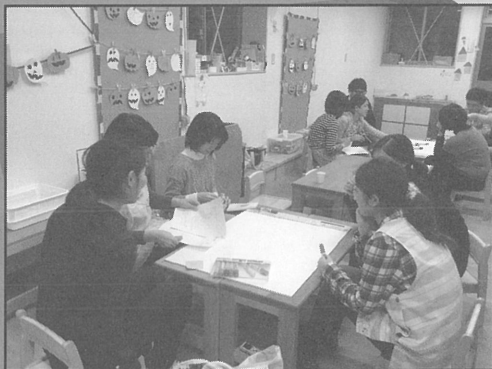
こども園をつくる

—文京区立お茶の水女子大学こども園の記録—

Vol.8 / 保育を支える連携と同僚性

～ シフト勤務制を生かす工夫から ～

森永路子



開園以来、本園では「子どもたちがこども園で過ごすすべての時間を豊かに」「子どもたちの自然な生活の流れで過ごす」「丁寧にかかわることを大切に」という願いを繰り返し確認しながら、保育を探索してきました。

私は、主任保育士として保育士の勤務シフト作成を担当しています。開園当初、本園のシフト勤務制は実現したいこと（保育や保育者同士の語り合いなど）を阻むもののように私には感じられていましたが、今では保育内容の充実と保育者の連携・同僚性を密にする可能性のある時間づくりの資源のように捉えられるようになりました。

保育者同士の協力体制やシフト勤務は、保育の質を支える「労働環境の質^{※1}」とも、保育の質の側面——「構造の質」「実施運営の質」「プロセスの質^{※2}」とも捉えられます。本園でも保育の質のためにより良い体制を探索しています。本園のこれまでのシフト勤務制の課題とその対策について、経過を追いながら

森永路子（もりなが みちこ）

文京区立お茶の水女子大学こども園主任保育士。

とめます。

長時間保育を支える保育士のシフト勤務制

〈開園当初の状況〉

本園は、7時15分～18時15分の通常保育時間、19時15分までの一時間が延長保育時間の十二時間開所、月曜から土曜まで週六日開所の園です。教育標準時間は三歳児が9時～13時、四、五歳児が9時～15時です。前出(本誌第一一五巻第三、第四号)「こども園をつくる」参照)の通り、園舎園庭などの環境は広くはありません。

クラス編成は各歳児(〇～五歳)一クラスで担任は二人ずつ、園全体では六クラス(学年)です。開園時刻から一時間経過した8時15分から18時15分までは、それぞれの保育室(一階乳児フロアに〇歳児室と一～二歳児室、二階幼児フロアに三～五歳児室)で過ごします。常勤保育士(クラス担任十二人と主任)は、早番から遅番まで複数のシフト、土曜当番と

平日振休のある勤務で長時間保育を支えます。他に数名の非常勤保育士が〇～二歳クラス、支援児の援助や午後の幼児フロアの保育補助に、私はフリー保育士の立場でフォローが必要などころに入ります。

子ども一人ひとりにきめ細やかな対応をしたいという願いから、本園の保育士の配置は、最低基準より多めの時間帯もあります。しかし本園の勤務シフトは、シフトのバリエーションが多い上に早めと遅めのシフトが毎日交互になるような不規則勤務になっており、厳しい状況です。環境的な制約(保育室の広さなど)と、保育方法(子どもたちの活動の充実のために場を分けることや移ることを保障する)との兼ね合い、そして保育者の願い(保護者と毎日顔を合わせて子どもの様子を伝えたいという担任の思い)があり、それらを大切にしたときに浮かび上がる課題がいくつもありません。以下に課題を挙げ、その解決のために行ったことをまとめます。

〈課題と対策、結果〉

課題①…「フォローしたい」

「遅番出勤者を待たずに散歩に出たい」「中早番の退勤の頃は、遊びが二か所で盛り上がっていて退勤しづらい」など、フォローを求める声が上がりました。でも、それが二〜三クラス同時のため、フリー保育士一人では全箇所はフォローできないという状況でした。

対策…フリー保育士が対応できる時間割をあらかじめ示し、フリー保育士が対応できない時間帯は他クラスと合同保育をするなど、協働体制をみんなで作りました。また、一日の流れをクラスやフロアで一緒に丁寧に確認し、クラス間の連携と保育の工夫を考え、非常勤保育士の勤務時間や役割の見直しをしました。
結果…クラス担任が時間的な見通しが持てるようになり、フロア内で体制を確認しながらクラスの活動や内容、フロアで一緒に過ごす時間の過ごし方を話しあうようになり、他クラスと相談や連携することが増えました。

課題②…「担任同士で話す時間がとれない」

クラス担任二人は休憩時間を交代でとり、勤務シフトが早めと遅めで違うため、一緒に保育をしても、打ち合わせ時間どころか休憩中や勤務前後に二人で雑談をする時間もほとんどないという状態でした。四、五歳児は、15時までが教育標準時間で、午睡は必要なのみです。〇〜三歳の子どもたちはそれぞれの生活リズムで過ごすので、起きている子と眠っている子がいて、遊びの援助と午睡中の呼吸チェック・見守りをするため、非常勤保育者と共に担任のうち一人は保育室に残ります。

対策…交代で休憩をとる担任に代わってフリー保育士が保育に入る時間をつくり、せめて五分でも休憩時間中に担任同士が雑談できるようにしました。

結果…はじめは五〜十分間程度の二人で過ごす短い時間でしたが、二人の休憩時間を重ねると保育室に二人が一緒にいる時間が増える

ことに気がつき、休憩時間中の雑談とは別に、話しあう時間がつくれるようになりました。今では他クラス同士でその時間をつくりあうようになりました。

さらなる対策…開園二年目の平成二十九年度には、クラス担任二人が一緒に夕方から研修に出かける機会も設定しました。

結果…担当歳児の保育を一緒に学び語りあう機会は貴重です。同じフロアの他クラス担任たちが当番を引き受けるなどしてフォローし、互いに調整しながら研修や打ち合わせの時間をつくりあうという協力体制ができました。

課題③…大人の動きと子どもの生活の流れ

開園から一年たち、保育者がシフト勤務に慣れ、勤務時間の切れ目を意識するようになると、勤務の切れ目の時間と子どもたちの生活の流れや遊びの盛り上がりとの時間が微妙にずれていることに気がつきました。子どもたちと日々過ごしている担任の大切な視点です。

対策…幼児、乳児のフロアごとにシフト調整

担当者をおき、フロア内の勤務シフトを子どもたちの生活の流れに沿ったものに柔軟に変更できるようにしました。フロア内で一人の勤務時間を十五分、後の時間にずらし、登園児がまだ少ない朝の時間は十五分間フロア内合同で過ごす時間を延ばし、延長保育直前の十五分間、疲れの見える子どもたちがクラス担任と落ち着いて過ごせるようにする、というようなやり方です。

結果…子どもたちの様子や育ちに添う、きめ細かい配慮ができる体制になってきました。

保育を支える連携と同僚性

へさまさまな大人とつながって

保育士同士だけでなく、こども園では栄養士と連携して食育の充実を、看護師と連携して健康と安全指導の充実を、他にもさまさまな方々（アート・表現・音楽・遊び場……）

と連携して、子どもたちの経験をより豊かに……と、保育を創造しています。また、保育の振り返りを行う中で、保育観につながる語り合いが充実し、大切にしたいことの共通認識が進んだように思います。「眠る・食べる・遊ぶを、豊かに、安全で健康に」「1号、2号（認定）のどちらの子どもたちにも寄り添い、必要な配慮を丁寧」「教育標準時間、夕方の保育とともに、さらなる保育の充実を」「養護面を丁寧に家庭的に」などです。

職員会議でその月のクラスの様子や保育のねらいを伝えあうこと、園内研究会で保育者の思いを語りあうことを重ね、子どもの育ちや保育で大切なことを共有しようとしています。

〈語りあう時間を大切に〉

私たちは本園の開園時に出会ったときから、「保育を語りあおう」としています。月に一回程度の園内研究会の時間は、事例を持ち寄

って語りあいます。雑談から始まったクラス担任同士の時間は、打ち合わせや振り返りの時間になり、フロアの保育者同士の打ち合わせや話し合い、そして語り合いにつながってきました。

開園当初は開所時間内や勤務時間内にはつくることが不可能と思われた語りあう時間を、開所時間を過ぎる超過勤務での対応ばかりせずとも当番担当者を調整することで、開所時間内のできるようになってきました。「何（どんな時間）を大切にしたいのか……」「これ（保育も語り合いも）を実現するためには……」と考えながら当番担当者の組み合わせを工夫すると、時間や体制がつくり出せそうです。

これから

〇～三歳児クラスは午睡の時間、四、五歳児クラスは教育標準時間後の異年齢で過ごす時間を中心に、互いに時間をつくりあうよう

になっています。また平成二十九年秋からは、通常、延長保育当番が乳児フロアと幼児フロアに一人ずつのところ、その一方を私が引き受けることで、そのフロアでは、18時15分～19時15分にフロアの保育者同士が全員顔を合わせて話しあえる新たな時間ができ、新しい語り合いも生まれています。二か月に一度は話し合いの機会をもちたいという声になり、取り組み始めたところです。

全職員での語り合いや共有が十分とはまだまだ言えませんが、保育者同士が主体的に連携し、主体的に打ちあわせ、同僚性が育ってきているように思います。保育の構造が整うことも大切でしたし、共通理解をすることと感謝の気持ちや助けあう気持ちを伝えあい支えあえる大人同士の関係性が、保育の質を高めることにつながるように感じています。

新指針・要領の改訂(定)、保育士の処遇改善や働き方改革等、世の中の動きもあって、保育士の働き方と保育の質が問われています。

保育の質と法令のどちらもしっかり守る、よい良い保育を探求しながら、今日も丁寧に子どもたちに向きあっていきたいと思っています。

1 注

保育の質を支えるものを①プロセスの質、②構造の質、③労働環境の質の3要素と捉える。(大宮勇雄『保育の質を高める』ひとなる書房 二〇〇六年)

2

保育の質の六つの側面を①志向性の質、②構造の質、③教育の概念と実践、④保育プロセスの質、⑤実施運営の質、⑥子どもたちの成果の質、と説明。(秋田喜代美『保育の質とは何か』NHK「視点・論点」二〇一七年八月一日放送 www.nhk.or.jp/kaisetsu-blog/)

参考文献

- 1 宮里暁美『子どもたちの四季』主婦の友社 二〇一四年
- 2 汐見稔幸『さあ、子どもたちの「未来」を話しませんか』小学館 二〇一七年
- 3 無藤隆「国の動きを読む!研究者の目2017 教員の働き方改革を巡って」『保育ナビ』二〇一七年十二月号 フレーベル館
- 4 矢藤誠慈郎『保育の質を高めるチームづくり』わかば社 二〇一七年